忘れえぬ人々

国木田独歩

多摩川（たまがわ）の二子（ふたこ）の渡しをわたって少しばかり行くと溝口（みぞのくち）という宿場がある。その中ほどに亀屋（かめや）という旅人宿（はたごや）がある。ちょうど三月の初めのころであった、この日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだにさびしいこの町が一段と物さびしい陰鬱（いんうつ）な寒そうな光景を呈していた。昨日（きのう）降った雪がまだ残っていて高低定まらぬ茅屋根（わらやね）の南の軒先からは雨滴（あまだれ）が風に吹かれて舞うて落ちている。草鞋（わらじ）の足痕（あしあと）にたまった泥水にすら寒そうな漣（さざなみ）が立っている。日が暮れると間もなく大概の店は戸を閉（し）めてしまった。闇（くら）い一筋町（ひとすじまち）がひっそりとしてしまった。旅人宿（はたごや）だけに亀屋の店の障子（しょうじ）には燈火（あかり）

が明（あか）く射（さ）していたが、今宵（こよい）は客もあまりないと見えて内もひっそりとして、おりおり雁頸（がんくび）の太そうな煙管（きせる）で火鉢（ひばち）の縁（ふち）をたたく音がするばかりである。

突然（だしぬけ）に障子をあけて一人（ひとり）の男がのっそり入（はい）ツて来た。長火鉢に寄っかかツて胸算用（むなさんよう）に余念もなかった主人（あるじ）が驚いてこちらを向く暇もなく、広い土間（どま）を三歩（みあし）ばかりに大股（おおまた）に歩いて、主人（あるじ）の鼻先に突ったツた男は年ごろ三十にはまだ二ツ三ツ足らざるべく、洋服、脚絆（きゃはん）、草鞋（わらじ）の旅装（なり）で鳥打ち帽をかぶり、右の手に蝙蝠傘（こうもり）を携え、左に小さな革包（かばん）を持ってそれをわきに抱いていた。

『一晩厄介になりたい。』

主人（あるじ）は客の風采（みなり）を視（み）ていてまだ何とも言わない、その時奥で手の鳴る音がした。

『六番でお手が鳴るよ。』

ほえるような声で主人（あるじ）は叫んだ。

『どちらさまでございます。』

主人（あるじ）は火鉢に寄っかかったままで問うた。客は肩をそびやかしてちょっと顔をしがめたが、たちまち口の辺（ほとり）に微笑（ほほえみ）をもらして、

『僕か、僕は東京。』

『それでどちらへお越しでございますナ。』

『八王子へ行くのだ。』

と答えて客はそこに腰を掛け脚絆（きゃはん）の緒（ひも）を解きにかかった。

『旦那（だんな）、東京から八王子なら道が変でございますねエ。』

主人（あるじ）は不審そうに客のようすを今さらのようにながめて、何か言いたげな口つきをした。客はすぐ気が付いた。

『いや僕は東京だが、今日（きょう）東京から来たのじゃアない、今日は晩（おそ）くなって川崎を出発（たっ）て来たからこんなに暮れてしまったのさ、ちょっと湯をおくれ。』

『早くお湯を持って来ないか。ヘエ随分今日はお寒

かったでしょう、八王子の方はまだまだ寒うございます。』

という主人(あるじ)の言葉はあいそがあっても一体の風(ふう)つきはきわめて無愛嬌(ぶあいきょう)である。年は六十ばかり、肥満(ふと)った体躯(からだ)の上に綿の多い半纏(はんてん)を着ているので肩からじきに太い頭が出て、幅の広い福々(ふくぶく)しい顔の目(ま)じりが下がっている。それでどこかに気むずかしいところが見えている。しかし正直なお爺(やじ)さんだなと客はすぐ思った。

客が足を洗ッてしまッて、まだふききらぬうち、主人(あるじ)は、

『七番へご案内申しな！』

と怒鳴ツた。それぎりで客へは何の挨拶もしない、その後ろ姿を見送りもしなかった。真っ黒な猫が厨房の方から来て、そッと主人の高い膝の上にはい上がって丸くなった。主人はこれを知っているのかいないのか、じっと目をふさいでいる。しばらくすると、右の手が煙草箱の方へ動いてその太い指が煙草を丸めだした。

『六番さんのお浴湯がすんだら七番のお客さんをご案内申しな！』

膝の猫がびっくりして飛び下りた。

『ばか！　貴様に言ったのじゃないわ。』

猫はあわてて厨房（くりや）の方へ駆けていってしまった。柱時計がゆるやかに八時を打った。

『お婆（ばあ）さん、吉蔵が眠そうにしているじゃあないか、早く被中炉（あんか）を入れてやってお寝かしな、かわいそうに。』

主人（あるじ）の声の方が眠そうである、厨房（くりや）の方で、

『吉蔵はここで本を復習（さらっ）ていますじゃないかね。』

お婆（ばあ）さんの声らしかった。

『そうかな。吉蔵もうお寝よ、朝早く起きてお復習（さら）いな。お婆さん早く被中炉（あんか）を入れておやんな。』

『今すぐ入れてやりますよ。』

勝手の方で下婢（かひ）とお婆さんと顔を見合わしてくすくすと笑った。店の方で大きなあくびの声がした。

『自分が眠いのだよ。』

五十を五つ六つ越えたらしい小さな老母が煤（くす）ぶった被中炉（あんか）に火を入れながらつぶやいた。

店の障子が風に吹かれてがたがたすると思うとパラパラと雨を吹きつける音が微（かす）かにした。

『もう店の戸を引き寄せて置きな、』と主人（あるじ）は怒鳴って、舌打ちをして、

『また降って来やあがった。』

と独言（ひとりごと）のようにつぶやいた。なるほど風が大分（だいぶ）強く

なって雨さえ降りだしたようである。

春先とはいえ、寒い寒い霙（みぞれ）まじりの風が広い武蔵野（むさしの）を荒れに荒れて終夜（よもすがら）、真（ま）っ闇（くら）な溝口（みぞのくち）の町の上をほえ狂った。

七番の座敷では十二時過ぎてもまだランプが耿々（こうこう）と輝いている。亀屋で起きている者といえばこの座敷の真ん中で、差し向かいで話している二人の客ばかりである。戸外（そと）は風雨の声いかにもすさまじく、雨戸が絶えず鳴っていた。

『この模様では明日（あした）のお立ちは無理ですぜ。』

と一人が相手の顔を見て言った。これは六番の客であ

る。

『何、別に用事はないのだから明日一日くらいここで暮らしてもいいんです。』

二人とも顔を赤くして鼻の先を光らしている。そばの膳の上には燗陶が三本乗っていて、杯には酒が残っている。二人とも心地よさそうに体をくつろげて、あぐらをかいて、火鉢を中にして煙草を吹かしている、六番の客は袍巻の袖から白い腕を臂まで出して巻煙草の灰を落としては、喫っている。二人の話しぶりはきわめて卒直であるものの今宵初めてこの宿舎で出合って、何かの口緒から、二口三口襖越しの話があっ

て、あまりのさびしさに六番の客から押しかけて来て、名刺の交換が済むや、酒を命じ、談話（はなし）に実が入って来るや、いつしか丁寧な言葉とぞんざいな言葉とを半混ぜに使うようになったものに違いない。

七番の客の名刺には大津弁二郎（おおつべんじろう）とある、別に何の肩書きもない。六番の客の名刺には秋山松之助とあって、これも肩書きがない。

大津とはすなわち日が暮れて着いた洋服の男である。やせ形（がた）な、すらりとして色の白いところは相手の秋山とはまるで違っている。秋山は二十五か六という年輩で、丸く肥えて赤ら顔で、目元に愛嬌（あいきょう）があって、いつ

もここにこしているらしい。大津は無名の文学者で、秋山は無名の画家で不思議にも同種類の青年がこの田舎（いなか）の旅宿（はたごや）で落ち合ったのであった。

『もう寝ようかねエ。随分悪口（あっこう）も言いつくしたようだ。』

　美術論から文学論から宗教論まで二人はかなり勝手にしゃべって、現今（いま）の文学者や画家の大家を手ひどく批評して十一時が打ったのに気が付かなかったのである。

『まだいいさ。どうせ明日（あした）はだめでしょうから夜通し話したってかまわないさ。』

画家の秋山はにこにこしながら言った。
『しかし何時（いくじ）でしょう。』
と大津は投げ出してあった時計を見て、
『おやもう十一時過ぎだ。』
『どうせ徹夜でさあ。』
秋山は一向平気である。杯を見つめて、
『しかし君が眠けりゃあ寝てもいい。』
『眠くはちっともない、君が疲れているだろうと思ってさ。僕は今日（きょう）晩（おそ）く川崎を立って三里半ばかしの道を歩いただけだから何ともないけれど。』
『なに僕だって何ともないさ、君が寝るならこれを借

りていって読んで見ようと思うだけです。』

　秋山は半紙十枚ばかりの原稿らしいものを取り上げた。その表紙には『忘れ得ぬ人々』と書いてある。

『それはほんとにだめですよ。つまり君の方でいうと鉛筆で書いたスケッチと同(おんな)じことで他人(ひと)にはわからないのだから。』

といっても大津は秋山の手からその原稿を取ろうとはしなかった。秋山は一枚二枚開(あ)けて見てところどころ読んで見て、

『スケッチにはスケッチだけのおもしろ味があるから少し拝見したいねエ。』

『まアちょっと借して見たまえ。』

と大津は秋山の手から原稿を取って、ところどころあけて見ていたが、二人はしばらく無言であった。戸外（そと）の風雨の声がこの時今さらのように二人の耳に入った。大津は自分の書いた原稿を見つめたままじっと耳を傾けて夢心地（ゆめごこち）になった。

『こんな晩は君の領分だねエ。』

　秋山の声は大津の耳に入（い）らないらしい。返事もしないでいる。風雨の音を聞いているのか、原稿を見ているのか、はた遠く百里のかなたの人を憶（おも）っているのか、秋山は心のうちで、大津の今の顔、今の目元はわが領

分だなと思った。

『君がこれを読むよりか、僕がこの題で話した方がよさそうだ。どうです、君は聴きますか。この原稿はほんの大要を書き止めて置いたのだから読んだってわからないからねエ。』

夢からさめたような目つきをして大津は目を秋山の方に転じた。

『詳しく話して聞かされるならなおのことさ。』

と秋山が大津の目を見ると、大津の目は少し涙にうるんでいて、異様な光を放っていた。

『僕はなるべく詳しく話すよ、おもしろくないと思っ

たら、遠慮なく注意してくれたまえ。その代わり僕も遠慮なく話すよ。なんだか僕の方で聞いてもらいたいような心持ちになって来たから妙じゃあないか。』

秋山は火鉢に炭をついで、鉄瓶（てつびん）の中へ冷めた煖陶（かんびん）を突っ込んだ。

『忘れ得ぬ人は必ずしも忘れてかなうまじき人にあらず、見たまえ僕のこの原稿の劈頭（へきとう）第一に書いてあるのはこの句である。』

大津はちょっと秋山の前にその原稿を差しいだした。

『ね。それで僕はまずこの句の説明をしようと思う。そうすればおのずからこの文の題意がわかるだろうか

ら。しかし君には大概わかっていると思うけれど。』
『そんなことを言わないで、ずんずんやりたまえよ。僕は世間の読者のつもりで聴いているから。失敬、横になって聴くよ。』
　秋山は煙草をくわえて横になった。右の手で頭を支（ささ）えて大津の顔を見ながら目元に微笑をたたえている。
『親とか子とかまたは朋友（ほうゆう）知己そのほか自分の世話になった教師先輩のごときは、つまり単に忘れ得ぬ人とのみはいえない。忘れてかなうまじき人といわなければならない、そこでここに恩愛の契りもなければ義理もない、ほんの赤の他人であって、本来をいうと忘れ

てしまったところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまうことのできない人がある。世間一般の者にそういう人があるとは言わないが少なくとも僕にはある。恐らくは君にもあるだろう。』

　秋山は黙ってうなずいた。

『僕が十九の歳（とし）の春の半（なか）ごろと記憶しているが、少し体軀（からだ）の具合が悪いのでしばらく保養する気で東京の学校を退（ひ）いて国へ帰る、その帰途（かえりみち）のことであった。大阪から例の瀬戸内通（せとうちがよ）いの汽船に乗って春海（しゅんかい）波平らかな内海（うちうみ）を航するのであるが、ほとんど一昔も前の事であるから、僕もその時の乗合の客がどんな人であった

やら、船長がどんな男であったやら、茶菓（ちゃか）を運ぶボーイの顔がどんなであったやら、そんなことは少しも憶（おぼ）えていない。多分僕に茶を注（つ）いでくれた客もあったろうし、甲板の上でいろいろと話しかけた人もあったろうが、何にも記憶に止まっていない。

『ただその時は健康が思わしくないからあまり浮き浮きしないで物思いに沈んでいたに違いない。絶えず甲板の上に出（い）で将来（ゆくすえ）の夢を描いてはこの世における人の身の上のことなどを思いつづけていたことだけは記憶している。もちろん若いものの癖でそれも不思議はないが。そこで僕は、春の日ののどかな光が油のような

海面に融（と）けほとんど漣（さざなみ）も立たぬ中を船の船首（へさき）が心地よい音をさせて水を切って進行するにつれて、霞（かすみ）たなびく島々を迎えては送り、右舷（うげん）左舷（さげん）の景色（けしき）をながめていた。菜の花と麦の青葉とで錦（にしき）を敷いたような島々がまるで霞の奥に浮いているように見える。そのうち船がある小さな島を右舷に見てその磯（いそ）から十町とは離れないところを通るので僕は欄に寄り何心（なにげ）なくその島をながめていた。山の根がたのかしこここに背の低い松が小杜（こもり）を作っているばかりで、見たところ畑（はた）もなく家らしいものも見えない。しんとしてさびしい磯の退潮（ひきしお）の痕（あと）が日に輝（ひか）って、小さな波が水際（みぎわ）をもてあそ

んでいるらしく長い線(すじ)が白刃(しらは)のように光っては消えている。無人島(むにんとう)でない事はその山よりも高い空で雲雀(ひばり)が啼(な)いているのが微(かす)かに聞こえるのでわかる。田畑ある島と知れけりあげ雲雀、これは僕の老父(おやじ)の句であるが、山のむこうには人家があるに相違ないと僕は思うた。と見るうち退潮(ひきしお)の痕(あと)の日に輝(ひか)っているところに一人の人がいるのが目についた。たしかに男である、また小供(こども)でもない。何かしきりに拾っては籠(かご)か桶(おけ)かに入れているらしい。二三歩(ふたあしみあし)あるいてはしやがみ、そして何か拾っている。自分はこのさびしい島かげの小さな磯を漁(あさ)っているこの人をじっとながめていた。船が進

むにつれて人影が黒い点のようになってしまった、そのうち磯も山も島全体が霞（かすみ）のかなたに消えてしまった。その後今日（きょう）が日までほとんど十年の間、僕は何度この島かげの顔も知らないこの人を憶（おも）い起こしたろう。これが僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

『その次は今から五年ばかり以前、正月元旦（がんたん）を父母の膝下（ひざもと）で祝ってすぐ九州旅行に出かけて、熊本（くまもと）から大分（おおいた）へと九州を横断した時のことであった。

『僕は朝早く弟と共に草鞋（わらじ）脚絆（きゃはん）で元気よく熊本を出発（た）った。その日はまだ日が高いうちに立野（たての）という宿場まで歩いてそこに一泊した。次の日のまだ登らない

うち立野を立って、かねての願いで、阿蘇山（あそさん）の白煙（はくえん）を目がけて霜を踏み桟橋を渡り、路を間違えたりしてようやく日中（おひる）時分に絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあッただろうか。熊本地方は温暖であるがうえに、風のないよく晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山もさまでは寒く感じない。高嶽（たかたけ）の絶頂（いただき）は噴火口から吐き出す水蒸気が凝って白くなっていたがそのほかは満山ほとんど雪を見ないで、ただ枯れ草白く風にそよぎ、焼け土のあるいは赤きあるいは黒きが旧噴火口の名残（なごり）をかしこここに止めて断崖（だんがい）をなし、その荒涼たる、光景は、筆も口もかなわない、これを

描くのはまず君の領分だと思う。

『僕らは一度噴火口の縁まで登って、しばらくはすさまじい穴をのぞき込んだり四方の大観をほしいままにしたりしていたが、さすがに頂は風が寒くってたまらないので、穴から少し下りると阿蘇神社があるそのそばに小さな小屋があって番茶くらいはのませてくれる、そこへ逃げ込んで団飯をかじって元気をつけて、また噴火口まで登った。

『その時は日がもうよほど傾いて肥後の平野を立てこめている霧靄が焦げて赤くなってちょうどそこに見える旧噴火口の断崖と同じような色に染まった。円錐形

にそびえて高く群峰を抜く九重嶺の裾野（すその）の高原数里の枯れ草が一面に夕陽（せきよう）を帯び、空気が水のように澄んでいるので人馬の行くのも見えそうである。天地寥廓（りょうかく）、しかも足もとではすさまじい響きをして白煙濛々（もうもう）と立ちのぼりまっすぐに空を衝（つ）き急に折れて高嶽（たかたけ）を掠（かす）め天の一方に消えてしまう。壮といわんか美といわんか惨（さん）といわんか、僕らは黙ったまま一言（ごん）も出さないでしばらく石像のように立っていた。この時天地悠々（ゆうゆう）の感、人間存在の不思議の念などが心の底からわいて来るのは自然のことだろうと思う。

『ところでもっとも僕らの感を惹（ひ）いたものは九重嶺と

阿蘇山との間の一大窪地（いちだいくぼち）であった。これはかねて世界最大の噴火口の旧跡と聞いていたがなるほど、九重嶺の高原が急に頽（おち）こんでいて数里にわたる絶壁がこの窪地の西を回（めぐ）っているのが眼下によく見える。男体山麓（なんたいさんろく）の噴火口は明媚幽邃（めいびゆうすい）の中禅寺湖と変わっているがこの大噴火口はいつしか五穀実る数千町歩の田園とかわって村落幾個の樹林や麦畑が今しも斜陽静かに輝いている。僕らがその夜、疲れた足を踏みのばして罪のない夢を結ぶを楽しんでいる宮地（みやじ）という宿駅もこの窪地にあるのである。

『いっそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景

を見ようかという説も二人の間に出たが、先が急がれるのでいよいよ山を下ることに決めて宮地を指(さ)して下(お)りた。　下(くだ)りは登りよりかずっと勾配(こうばい)が緩(ゆる)やかで、山の尾や谷間の枯れ草の間を蛇(へび)のようにうねっている路をたどって急ぐと、村に近づくにつれて枯れ草を着けた馬をいくつか逐(お)いこした。　あたりを見るとかしここの山の尾の小路(こみち)をのどかな鈴の音夕陽を帯びて人馬いくつとなく麓(ふもと)をさして帰りゆくのが数えられる、馬はどれもみな枯れ草を着けている。　麓はじきそこに見えていても容易には村へ出ないので、日は暮れかかるし僕らは大急ぎに急いでしまいには走って下りた。

『村に出た時はもう日が暮れて夕闇ほのぐらいころであった。村の夕暮れのにぎわいは格別で、壮年男女は一日の仕事のしまいに忙しく子供は薄暗い垣根の陰や竈の火の見える軒先に集まって笑ったり歌ったり泣いたりしている、これはどこの田舎も同じことであるが、僕は荒涼たる阿蘇の草原から駆け下りて突然、この人寰に投じた時ほど、これらの光景に搏たれたことはない。二人は疲れた足をひきずって、日暮れて路遠きを感じながらも、懐かしいような心持ちで宮地を今宵の当てに歩いた。

『一村離れて林や畑の間をしばらく行くと日はとっぷ

り暮れて二人の影がはっきりと地上に印するようになった。振り向いて西の空を仰ぐと阿蘇の分派の一峰の右に新月がこの窪地一帯の村落を我物顔（わがものがお）に澄んで蒼味（あおみ）がかった水のような光を放っている。二人は気がついてすぐ頭の上を仰ぐと、昼間は真っ白に立ちのぼる噴煙が月の光を受けて灰色に染まって碧瑠璃（へきるり）の大空を衝（つ）いているさまが、いかにもすさまじくまた美しかった。長さよりも幅の方が長い橋にさしかかったから、幸いとその欄に倚（よ）っかかって疲れきった足を休めながら二人は噴煙のさまのさまざまに変化するをながめたり、聞くともなしに村落の人語の遠くに聞こゆる

を聞いたりしていた。　すると二人が今来た道の方から空車（からぐるま）らしい荷車の音が林などに反響して虚空（こくう）に響き渡って次第に近づいて来るのが手に取るように聞こえだした。

『しばらくすると朗々（ほがらか）な澄（す）んだ声で流して歩く馬子唄（まごうた）が空車の音につれて漸々（ぜんぜん）と近づいて来た。　僕は噴煙をながめたままで耳を傾けて、　この声の近づくのを待つともなしに待っていた。

『人影が見えたと思うと「宮地やよいところじゃ阿蘇山ふもと」という俗謡（うた）を長く引いてちょうど僕らが立っている橋の少し手前まで流して来たその俗謡（うた）の

意（こころ）と悲壮な声とがどんなに僕の情（こころ）を動かしたろう。二十四、五かと思われる屈強な壮漢（わかもの）が手綱（たづな）を牽（ひ）いて僕らの方を見向きもしないで通ってゆくのを僕はじっとみつめていた。夕月の光を背にしていたからその横顔もはっきりとは知れなかったがそのたくましげな体軀（からだ）の黒い輪郭が今も僕の目の底に残っている。

『僕は壮漢（わかもの）の後ろ影をじっと見送って、そして阿蘇の噴煙を見あげた。「忘れ得ぬ人々」の一人はすなわちこの壮漢（わかもの）である。

『その次は四国の三津が浜に一泊して汽船便（びん）を待った時のことであった。夏の初めと記憶しているが僕は朝

早く旅宿(やど)を出て汽船の来るのは午後と聞いたのでこの港の浜や町を散歩した。奥に松山を控えているだけこの港の繁盛(はんじょう)は格別で、分けても朝は魚市(うおいち)が立つので魚市場の近傍の雑踏は非常なものであった。大空は名残(なごり)なく晴れて朝日麗(うらら)かに輝き、光る物には反射を与え、色あるものには光を添えて雑踏の光景をさらに殷々(にぎにぎ)しくしていた。叫ぶもの呼ぶもの、笑声嬉々(きき)としてここに起これば、歓呼怒罵(どば)乱れてかしこにわくというありさまで、売るもの買うもの、老若男女(ろうにゃくなんにょ)、いずれも忙しそうにおもしろそうにうれしそうに、駆けたり追ったりしている。露店(ろてん)が並んで立ち食いの客を待っ

ている。売っている品(もの)は言わずもがなで、食ってる人は大概船頭船方(せんどうふなかた)の類(たぐい)にきまっている。鯛(たい)や比良目(ひらめ)や海鰻(あなご)や章魚(たこ)が、そこらに投げ出してある。なまぐさい臭(にお)いが人々の立ち騒ぐ袖(そで)や裾(すそ)にあおられて鼻を打つ。

『僕は全くの旅客(りょかく)でこの土地には縁もゆかりもない身だから、知る顔もなければ見覚えの禿(は)げ頭もない。そこで何となくこれらの光景が異様な感を起こさせて、世のさまを一段鮮(あざ)やかにながめるような心地がした。僕はほとんど自己(おのれ)をわすれてこの雑踏の中(うち)をぶらぶらと歩き、やや物静かなる街(ちまた)の一端(はし)に出た。

『するとすぐ僕の耳に入ったのは琵琶(びわ)の音(ね)であった。

そこの店先に一人の琵琶僧が立っていた。歳（とし）のころ四十を五ツ六ツも越えたらしく、幅の広い四角な顔の丈（たけ）の低い肥えた漢子（おとこ）であった。その顔の色、その目の光はちょうど悲しげな琵琶の音にふさわしく、あの咽（むせ）ぶような糸の音につれて謡（うた）う声が沈んで濁って淀（よど）んでいた。巷（ちまた）の人は一人もこの僧を顧みない、家々の者はたれもこの琵琶に耳を傾けるふうも見せない。朝日は輝く浮世はせわしい。

『しかし僕はじっとこの琵琶僧をながめて、その琵琶の音に耳を傾けた。この道幅の狭い軒端（のきば）のそろわない、しかもせわしそうな巷（ちまた）の光景がこの琵琶僧とこの琵

琶の音とに調和しないようでしかもどこかに深い約束があるように感じられた。あの嗚咽（おえつ）する琵琶の音が巷の軒から軒へと漂うて勇ましげな売り声や、かしましい鉄砧（かなしき）の音と雑（ま）ざって、別に一道（どう）の清泉が濁波（だくは）の間を潜（くぐ）って流れるようなのを聞いていると、うれしそうな、浮き浮きした、おもしろそうな、忙しそうな顔つきをしている巷の人々の心の底の糸が自然の調べをかなでているように思われた、「忘れえぬ人々」の一人はすなわちこの琵琶僧である。』

　ここまで話して来て大津は静かにその原稿を下に置いてしばらく考え込んでいた。戸外（そと）の雨風の響きは少

しも衰えない。秋山は起き直って、

『それから。』

『もうよそう、あまりふけるから。まだいくらもある。北海道歌志内（うたしな）の鉱夫、大連（だいれん）湾頭の青年漁夫、番匠川（ばんしょうがわ）の瘤（こぶ）ある舟子（ふなこ）など僕が一々この原稿にあるだけを詳しく話すなら夜が明けてしまうよ。とにかく、僕がなぜこれらの人々を忘るることができないかという、それは憶（おも）い起こすからである。なぜ僕が憶い起こすだろうか。僕はそれを君に話して見たいがね。

『要するに僕は絶えず人生の問題に苦しんでいながらまた自己将来の大望（たいもう）に圧せられて自分で苦しんでいる

不幸（ふしあわせ）な男である。

『そこで僕は今夜（こよい）のような晩に独（ひと）り夜ふけて燈（ともしび）に向かっているとこの生の孤立を感じて堪（た）え難いほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角（つの）がぼきり折れてしまって、なんだか人懐（ひとなつ）かしくなって来る。いろいろの古い事や友の上を考えだす。その時油然（ゆぜん）として僕の心に浮かんで来るのはすなわちこれらの人々である。そうでない、これらの人々を見た時の周囲の光景の裡（うち）に立つこれらの人々である。われと他と何の相違があるか、みなこれこの生を天の一方地の一角に享（う）けて悠々（ゆうゆう）たる行路をたどり、相携えて無窮の天に帰る者で

はないか、というような感が心の底から起こって来てわれ知らず涙が頰（ほお）をつたうことがある。その時は実に我（われ）もなければ他（ひと）もない、ただたれもかれも懐かしくって、忍ばれて来る、

『僕はその時ほど心の平穏を感ずることはない、その時ほど自由を感ずることはない、その時ほど名利（めいり）競争の俗念消えてすべての物に対する同情の念の深い時はない。

『僕はどうにかしてこの題目で僕の思う存分に書いて見たいと思うている。僕は天下必ず同感の士あることと信ずる。』

その後二年経(た)った。

大津は故(ゆえ)あって東北のある地方に住まっていた。溝口(みぞのくち)の旅宿(やど)で初めてあった秋山との交際は全く絶えた。ちょうど、大津が溝口に泊まった時の時候であったが、雨の降る晩のこと。大津は独(ひと)り机に向かって瞑想(めいそう)に沈んでいた。机の上には二年前(まえ)秋山に示した原稿と同じの『忘れ得ぬ人々』が置いてあって、その最後に書き加えてあったのは『亀屋(かめや)の主人(あるじ)』であった。『秋山』ではなかった。

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店
1939（昭和14）年2月15日第1刷発行
1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行
2002（平成14）年4月5日第77刷発行
底本の親本：「武蔵野」民友社
1901（明治34）年3月
初出：「国民之友」
1898（明治31）年4月
入力：土屋隆
校正：蒋龍
2009年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。